

むかし、あるところに、男の子が、おかあさんとふたりで暮らしていました。

あるとき、お母さんが病気になって、働けなくなってしまうました。男の子は、お金持ちの権造おじさんにたのんで、お金を貸してもらいました。けれども、菓や食べ物を買おうと、借りたお金はすぐになくなってしまいました。男の子はもう一度権造おじさんの所に行きました。権造おじさんは、

「貸してやってもいいが、その前に、貸した金を返せ」といいました。男の子はこまっつてしまいました。でも、どうすることもできません。しかたなく帰ってきました。

帰るとちゅう、お腹はすくし、道ばたで休んでいるうちに、男の子は、眠ってしまいました。すると、夢の中に、ひとりのおじいさんがあらわれて、

「このげたをはいて転ぶと、転ぶたびに小判が一枚出る」といって、一本歯のげたを一足くれました。そして、

「あんまりごろごろ転んでいると背が低くなるから、気をおつけ」といって消えました。

男の子が目を覚ますと、そばに一本歯のげたが置いてありました。男の子は、さっそくげたをはいて転んでみました。すると、小判が一枚、チャリンと出ました。男の子は、大喜びで、げたを持って家に帰りました。

しばらくして、権造おじさんが、たからのげたのことを聞きつけました。権造おじさんはすぐに男の子の所にやって来て、

「貸した金は返さなくていいから、そのげたをわしにゆずってくれ」といいました。男の子は、

「いいや。このげたはわたしが授かったものだから、あげられません」とことわりました。ところが、権造おじさんは、むりやりげたをひったくって、持って帰ってしまいました。

権造おじさんは、家に帰ると、戸を閉め切って、土間に大ぶろしきを広げました。そして、その上で、げたをはいてごろんと転んでみました。すると、小判がチャリンと出ました。権造おじさんは喜んで、ふろしきの上でごろごろと何度も何度も転びました。みるまに、小判が山のように出ました。けれども、転ぶたびに権造おじさんの背が低くなっていきます。しまいには、虫ぐらいの大きさになってしまいました。

男の子は、おじさんがどうしているかと思つて、やって来ました。戸を開けてみると、小判が山のように積もっていました。けれどもおじさんのすがたはありません。よくよく見ると、土間のすみっこのほうで、小さいものが動いています。それが権造おじさんでした。

男の子は、げたを取りもどし、小判を持って家に帰りました。いまでも、ゴンゾウムシという虫がいますが、それは、欲ばりの権造おじさんのなれの果てだということです。

おしまい